10

国　語　問　題　紙

2025 年 2 月 10 日

11：50 ～ 12：50（60 分）

注　意　事　項

1．国語の問題紙は全19ページである。

2．解答はすべて選択肢の中から選び，その番号を解答用紙（マークシート）の指定された欄にマークすること。

3．試験開始の合図があるまで問題紙を開いてはいけない。

4．試験終了まで退室してはいけない。

国

一

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

小学校から高校を卒業するまでの12年間、僕たちは学校で教科書を学ぶ。大学でも一部の授業ではそうだ。そんな長い間、学び続けた教科書を久しぶりに見ると、その内容が変わっていて驚くことがある。たとえば僕が中学生や高校生の頃には、鎌倉幕府は１１９２年に成立したと教えられていて「イイクニ（１１９２）作ろう鎌倉幕府」と覚えたものだった。しかし、最近の教科書では１１９２年ではなく、１１８５年から鎌倉時代は始まったとされている。同じようなことは理科の教科書でもあり、以前は太陽系の惑星は九つあったが、今の教科書では冥王星が惑星から外れて八つとなっている。天の川銀河系の形も、以前は渦巻銀河型で図示されていたが、現在は棒渦巻銀河型となっている。生物でも、僕が中学生の頃には、キノコなどは胞子で増える植物という扱いだったが、今の教科書では菌界という動物界や植物界と並ぶ一つの界として独立している。これらは、つまり学問が進歩したことにより、知見が訂正されたということだ。自然科学でも人文科学でも同じだが、新しい情報が得られれば、かつて正しいと思われていたことが間違いだとわかることは珍しくなく、訂正されることで学問は進歩していく。

そう言われると納得してしまいそうになるが、ちょっと待って欲しい。教科書が書き換えられるということは、つまり僕たちは間違ったことを勉強し続けてきたということなのだろうか？　教科書や科学的知見といった言葉を聞けば、それは無条件に正しいものだと思われがちである。しかし、実は科学的知見と呼ばれるものは、その少なくない部分が、新陳代謝をするように割に短時間で書き換えられてしまうのが実際である。もちろん教科書に載るような科学的知見は、[1]新陳代謝もあまりない骨格にあたるようなもので、そうそう変更がある訳ではないが、そのようなものであっても時に書き換えられてしまうのである。

当たり前と言えば当たり前だが、[2]科学の知見は「神の言葉」ではない。だからそれは「絶対的な真理」、つまりそれ以上のものがない〝ベスト〟ではなく、現在人間が把握可能な範囲でより正しいと考えられている〝ベター〟な知見の集合体である。「ベスト」であるはずの「神の言葉」は、「神」が違えば時に違いがあり、お互いが「絶対的な真理」を譲らないため、進化もなければ発展もなく、残るのは争いだけになる。しかし、科学の知見は、時に異なった説が融合して新たな発展を生み出したり、新しい発見があれば修正され、より正確な知見へと進化するようなことが起きる。そういった柔軟性、[a]可塑性こそが、科学という体系の優れた特性である。ただその結果、教科書は書き換えられることになるし、科学

国

的知見はすべて仮説に過ぎない、といった荒っぽい言説も、あながち誤りとは言えないことになってしまう。

一方、現代社会では科学的な考え方を基盤とすることが原則であり、何か問題が起こった時には「科学的な見地から検討する」といったことがよく言われる。だが、ここまで書いてきたように科学的な知見とは、［　　X　　］ではなく、あくまで現時点で最も確からしい仮説（場合によっては、お互いに矛盾する複数の仮説）を提供しているに過ぎない。この問題をここ数年ネットを中心に議論のあった新型コロナウイルスに対するワクチン接種を例に考えてみよう。

新型コロナウイルスに対するワクチン接種は感染対策の切り札と考えられ、２０２３年３月時点で１３３億回以上の接種が世界中で行われたとされている。これだけ大規模に世界中で行われている感染対策に対して、その効果を疑問視するだけでなく、有害であるという主張まで出ている。一体、これはどういうことなのだろうか？　この問題は、科学的なワクチン肯定派と非科学的な反ワクチン派という構図で捉えられがちであるが、実際はそんな単純な話ではない。[3]どちらの立場にも科学的なエビデンスに基づく論拠が存在している。

普通に考えると科学的な論争は、ワクチン肯定派にブ[A]があるように思える。ワクチンを用いたウイルス感染への対策は、人類の脅威であった天然痘に対するエドワード・ジェンナーの種痘法に端を発しており、これは１９８０年のＷＨＯ（世界保健機関）による天然痘撲滅宣言へとつながっていく。人類の天然痘ウイルスに対する完全勝利の金字塔である。また、麻疹（ましん）・風疹・水疱瘡（みずぼうそう）やおたふくかぜといったウイルス性の疾患に対しても、ワクチン接種を用いた感染予防法は確立されていると言ってよい。人間には獲得免疫と呼ばれる、異物に対して後天的に免疫が強化される機構が備わっており、ワクチンを打てば一定の免疫力が得られることは、一般的に言えば確実である。実際、新型コロナウイルスに対してワクチン接種が効果的であったとする科学的な知見は、権威ある医学誌に複数の研究グループから報告されている。感染を阻止できるのか、どれだけ重症化を防げるのか、といった有効性の程度には議論があっても、全体として言えば一定の効果があると考えることには妥当性がある。だからこそ世界各地でワクチン接種が行われているのである。

一方、反ワクチン派にも有力な主張がある。今回、新型コロナウイルスへの主力ワクチンとして使われたのはｍＲＮＡワクチン（他のタイプもあるが、日本では使用例も少なく、ここでは話に含めない）と呼ばれる新型のワクチンである。従来ウイルスに対するワクチンでは、弱毒化もしくは不活化したウイルス等を抗原としていたが、その抗原をどうやって大量に調製するのかといった技術的な問題や、人に接種して大丈夫なのかという有効性や安全性の問題があり、これらの製造・検証には急いでも通常３〜４年は必要とされる。新型コロナウイルスのワクチンは、パンデミックが始まってか

ら、わずか1年足らずで製品化されたが、この驚異的なスピードはmRNAワクチンという新しい技術の賜物[b]であった。

しかし、この方法はウイルスタンパク質をコードする遺伝子（mRNA）を注射して、ヒトの体内でウイルスタンパク質を作らせて、それを抗原にするという、まったく新しい原理であり、新型コロナウイルスのパンデミックが始まる前には、この方法で作られたワクチンが認可された例はなかった。ワクチンの完成を3～4年も待てないという世界的な状況が、mRNAワクチンの実用化を後押しした面は否めない。スピードを重視したため、新手法にもかかわらず時間がかかる安全性試験の一部を省略して接種が始まっており、こういった措置は状況を考えると理解はできるものの、手続き的に異例であり、リスクを伴うものであったことは確かである。

技術的な面から考えても、この手法では原理的に自分の細胞の中で抗原が作られることになるが、では、その抗原を作る細胞が自分の免疫細胞により攻撃されることはないのだろうか？　抗原となっているコロナウイルスのスパイクタンパク質は細胞膜に存在する性質を持っており、一部はそれを作った細胞の表面に留まってしまう。すでに体内に一定量の抗体がある状態でブースター[注]接種などを行えば、抗原を作る細胞は自分の免疫システムからの攻撃対象となるはずである。つまりmRNAワクチンの追加接種は、体内に自分の免疫機構によって攻撃されてしまう細胞をたくさん作ることになる。どこの細胞でスパイクタンパクが作られるかは確定的に予測することができず、万が一、大切な細胞にmRNAワクチンが入り込み、そこでスパイクタンパク質を作るようになれば、その細胞が攻撃されることになる。それが健康被害を引き起こすことはないのだろうか？

また、スパイクタンパク質自体にも血栓を生じさせる性質があり、体内で多量に合成された際の毒性を問題視する論文や、ウイルスに対する抗体により逆に感染が促進されるADE（Antibody-Dependent Enhancement）と呼ばれる現象などについても複数の論文が出ている。また長期的な影響という点からは、mRNAワクチンにコードされたスパイクタンパク質を作る遺伝子が我々の染色体に入り込んでしまう危険性も指摘されている。こういったさまざまな懸念は、いずれもリスクの程度には議論があるものの、科学的根拠のないものではなく、決して非科学的な妄言ではない。

このような社会的に大きな関心のある問題を、大雑把にまとめることには批判があるかもしれないが、あえてその愚を犯すなら、新型コロナウイルスに対するmRNAワクチン接種は一定の効果が期待できるが、短期的・長期的な健康被害を生むリスクも否定できない、ということになる。構図的には、飛行機に乗れば便利だが墜落するかもしれないというようなリスク&ベネフィットの問題となっている。ワクチン肯定派は［　I　］が大いに優ると主張し、反ワクチン派は

（注）ブースター接種…一度ワクチンの接種を済ませた人に行なう追加接種のこと。

Ⅱ　がほとんどないにもかかわらず　Ⅲ　が高いと主張している。この論争はワクチン接種の正確な有効性とリスクの程度を解明すれば結論がでることであるが、この一見単純に思えることも、人間を対象とした研究では多くの制約があり、現状では不明な部分が残されていると言わざるを得ない。ワクチンを打った人がバタバタ亡くなるほどリスクが高いものでないことは確実であるが、ワクチン接種後に急死した例も一定数報告されており、その因果関係はきちんと検証されるべきだろう。また、ワクチンの有効性に関しても、リスクを指摘する声を黙らせるほどの劇的な効果がなかったことは確かだと思う。新型コロナウイルスに対するｍＲＮＡワクチン接種の是非は、もう少し時間をかけた検証が必要なのである。

結局の所、全世界で展開された新型コロナウイルスに対するワクチン接種であるが、それは卓効があり安全と科学的に結論づけられたから使用された訳ではなく、大局的な政治判断から接種が始まったのである。新型コロナウイルスのパンデミックからどうやって国民の生命を守るか立案する側は、高齢者から若年層まで国民全体を考えて、またリスクとベネフィットの両面を考えて施策を打っていく必要がある。判断は急を要しており科学的な論争に一定の決着がつくまで黙って待っている訳にも、ゼロリスクにコウ泥（B）する訳にもいかない。その時点の科学的知見に照らした妥当性と現実的な問題への対処と、その両方をカン案（C）した判断が必要で、「ベターな選択」としてワクチン接種を選んだのだ。それは当時の判断として最善のものだったと個人的には思う。しかし、[4]それは科学の進展により、今後費用対効果や安全性の検証に問題があったと判断されることになる可能性を否定するものではない。ある意味、それが科学に基づいた判断の宿命なのである。

また、このような社会問題が絡んだ科学論争は時に歪（ゆが）んだものになりがちな点にも注意が必要である。政治的な判断には責任がつきまとうため、その判断が間違っていたとする知見の公表や報道には有形無形の圧力がかかることが起こり得る。さらに言うなら、ワクチン販売で巨大な富を得ることになる製薬会社等の意図が、科学の世界にまったく入り込む余地がないと考えるのも、ずいぶんとナイーブなことである。新型コロナワクチンに関する議論についても、そういった歪みが大なり小なりあるようには感じるが、それは時間と共に心ある科学者たちの健全な科学論争へと収束していくことを期待している。科学の世界に救いがあるのは、間違った言説が一時広まっても、50年や１００年といった長い時間で考えれば、それが科学を支配し続けることはできないということである。それは科学の知見が「ベターな選択」に過ぎない理由と同様、科学が進歩し成長し、変わっていくという性質ゆえの帰着である。皮肉に響くかもしれないが、[5]それが科学と

国

いうものの本然の性なのである。

（中屋敷均『わからない世界と向き合うために』による。ただし一部変更した。）

問一 波線a・bの漢字の読みとして最も適切なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ・ 2 。

1 a 可塑性 ① かさくせい ② かぎゃくせい ③ かそせい ④ かそくせい ⑤ かぼうせい

2 b 賜物 ① ちょうぶつ ② ちょうもの ③ ちょうもつ ④ たまぶつ ⑤ たまもの

問二 二重傍線A～Cのカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 3 ～ 5 。

A 3 ブ

① この職場の給料はブアイ制度を採用している。
② 彼は幼い頃からブンブ両道に秀でた逸材だ。
③ 彼はいつもムスッとしていてブアイソウだ。
④ 一寸の虫にもゴブの魂。
⑤ 今夜の仮面ブトウカイに招待された。

B 4 コウ泥

① コウキュウの平和を願う。
② 不法に侵入した容疑でコウソクされた。
③ 判決に不服なので即日コウソした。
④ あの事件は犯人が捕まらないまま、先月ジコウとなった。
⑤ この坂のコウバイはかなりきつくて、登るのがたいへんだ。

C 5 カン案

① 温厚な彼でもさすがにカンニン袋の緒が切れた。
② こんな事態になってしまい、誠にイカンに存じます。
③ 格闘技の試合でカンセツ技が決まった。
④ 入学式でテニスサークルからカンユウを受けた。
⑤ 不祥事を起こして親からカンドウされてしまった。

問三 傍線1「新陳代謝もあまりない骨格にあたるようなもの」とあるが、どのような意味か。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 不要になった部分を保持したまま排泄することもない、化石のように貴重なものである。
② 簡単に古びて新しいものに取って代わられることもない、物事の土台となるものである。
③ 肉や皮といった変化の激しい表層的なものとは異なり、不変かつ無条件に正しいものである。
④ 教科書は情報の更新に時間がかかるため、新しい知見を取り入れられず、その内容は古くて薄いものである。
⑤ 長時間かけても内容が古い知見のままで、学んでも骨折り損になってしまうものである。

問四 傍線2「科学の知見は「神の言葉」ではない」とあるが、それでは科学の知見はどのようなものだと著者は考えているか。最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 〝ベスト〟ではなく〝ベター〟な知見の集合体であるため、異なる説とも融合して発展したり、新発見があればより正確なものに修正されたりしうるもの。
② 〝ベスト〟ではなく〝ベター〟な知見の集合体であるため、所詮は仮説の寄せ集めに過ぎず、教科書も頻繁に書き換えられるような不安定なもの。
③ 〝ベスト〟ではなく〝ベター〟な知見の集合体であるため、暫定的な「正解」に過ぎず、時が経てば必ず間違いであると判断される運命にあるもの。
④ 〝ベスト〟ではなく〝ベター〟な知見の集合体であるため、無条件で正しい「絶対的な真理」などではなく、柔軟性もなく進化もなければ発展もないもの。
⑤ 〝ベスト〟ではなく〝ベター〟な知見の集合体であるため、お互いに矛盾する複数の仮説がそれぞれに異なる主張を譲ることなく、常に争っているようなもの。

問五 空欄Ｘに入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 学問が進歩したことにより訂正された知見
② 割に短時間で書き換えられてしまうもの
③ 世間に広まった間違った情報や言説
④ 有形無形の圧力がかかって歪んでしまったもの
⑤ 何か絶対的な真実を与えてくれるもの

問六 傍線３「どちらの立場にも科学的なエビデンスに基づく論拠が存在している。」とあるが、反ワクチン派の論拠として**適切でないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 抗体となっているコロナウイルスのスパイクタンパク質自体に血栓を生じさせる性質があり、それが体内で大量に合成された際の毒性が問題視されている。
② 長期的に見れば、ｍＲＮＡワクチンにコードされたスパイクタンパク質を作る遺伝子が人間の染色体に入り込む危険性も指摘されている。
③ 接種後に急死した例も数多く報告されており、ワクチンは効果がないばかりか有害であることがデータからも実証されている。
④ 自分の細胞の中で抗原が作られることになるが、その細胞が自分の免疫細胞からの攻撃対象となり、健康被害を引き起こす恐れがある。
⑤ 新型ワクチンは、通常３～４年かかるところ１年足らずで製品化されたが、安全性試験の一部を省略しておりリスクを伴うものである。

問七 空欄Ⅰ～Ⅲには、「リスク」か「ベネフィット」のいずれかが入る。組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
①	リスク	リスク	ベネフィット
②	ベネフィット	ベネフィット	リスク
③	ベネフィット	リスク	ベネフィット
④	リスク	ベネフィット	リスク
⑤	ベネフィット	リスク	リスク
⑥	リスク	ベネフィット	ベネフィット

問八 傍線４「それは科学の進展により、今後費用対効果や安全性の検証に問題があったと判断されることになる可能性を否定するものではない」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① ワクチン接種について、当時は「ベターな選択」として選ばれたが、今後、科学的知見の進展によっては、費用対効果や安全性の検証に対して否定的な評価が下される可能性もある。

② ワクチン接種について、リスク＆ベネフィットの問題から当時は最善の判断だったと思われるが、接種後の死亡例もあり、今後の検証によっては裁判で有罪になる可能性が高い。

③ ワクチン接種について、急を要する判断だったことは理解するが、費用対効果も悪く安全性の確認も不十分だったことは明らかで、やはり行うべきではなかった。

④ ワクチン接種について、現在は費用対効果や安全性について不明な点が多いが、将来的には時間をかけた検証の結果、否定的な評価が下される可能性は高い。

⑤ ワクチン接種について、その真相を明らかにするには有形無形の圧力がかかる可能性があるが、長い時間をかければ心ある科学者によって否定的な評価が下されるであろう。

問九 傍線５「それが科学というものの本然の性なのである」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

① 科学とは、その根本にある本質の部分はそうそう変更がある訳ではなく、その書き換えられない不変な部分こそが本来の性質である。

② 科学とは、常にリスク＆ベネフィットの問題であり、その両面を考えて施策を打っていく必要があるというのが本来の性質である。

③ 科学とは、ワクチン販売など利害関係のある民間企業の意図が入り込む余地があり、人間の思惑に左右されるのが本来の性質である。

④ 科学とは、社会問題が絡んだ場合、政治的な判断が間違っても有形無形の圧力がかかり、時に歪んだものになるのが本来の性質である。

⑤ 科学とは、その時点での最も確からしい仮説を提供しているに過ぎず、進歩し成長し変わっていくというのが本来の性質である。

国

問十　本文の内容と**合致するものには**①を、**合致しないものには**②をマークせよ。解答番号は 13 ～ 17 。

13　ア　安全性の確認が不十分なまま、大局的な政治判断から始まった新型コロナウイルスワクチン接種は、行うべきではなかった。

14　イ　人間には獲得免疫と呼ばれるものがあり、ワクチンを打てば一定の免疫力が得られることが確認されている。

15　ウ　すべての科学的知見は「仮説」に過ぎず、新たな知見によって容易に書き換えられるため、教科書で覚えたことを信じ込むのは危険である。

16　エ　ｍＲＮＡワクチンは、新型コロナウイルスへの主力ワクチンとして使われたが、その接種の是非については、時間をかけた検証が必要である。

17　オ　科学の知見は「ベターな選択」に過ぎないが、間違った言説が一時広まっても、それが科学を支配し続けることはないというのは、科学の世界にとっての救いである。

国

二　次の文章を読み、後の設問に答えよ。

ヨーロッパ中世は「身分制社会」だと言われるが、それはどのような意味でだろうか。中世初期より、伝統的に認められてきた社会身分があり、大半の人間が親の身分・職業を世襲していったことは疑えない。しかし法的な制度としての閉鎖的な身分制社会が出来上がるのは、中世というよりむしろ近世に入ってからであり、それ以前に人々の生活・行動に甚大な影響を及ぼしていたのは、実際の身分制というよりも、むしろ表象としての身分制ではないのだろうか。[1] つまり、現実の社会・経済条件に照らした身分――ないし階級――でも、政治的・法的な身分でもなくて、それらとはしばしば乖リ[A]した、イデオロギーに裏打ちされた身分イメージを、エリート階層が――［　a　］になるのも懼(おそ)れずに――保持しつづけたのではないだろうか。

教会、王、貴族らは、そうした表象の形成にいかに関わったのか、これに絡む形で、民衆の反抗はいついかに噴出したのだろうか、考えてみよう。

変貌する社会構成

[2] いわゆる古典荘園がその古典性を保てなくなり、直営地経営をする領主と賦役労働をする保有農、さらには隷農という単純な支配／被支配関係が崩れていくのが、九―一〇世紀のことであった。中世盛期になると、身分の境界はいよいよ曖昧・流動的になり、幾多の中間的な形態が析出してきた。不定の賦役義務を負い財産所有や結婚能力のない非自由人＝僕婢は相変わらず存在したが、なかには世帯持ち農奴や手工業者としての隷属民も現れた。フランク時代(注)からいた高い地位の非自由人たるミニステリアレスは、ドイツにおいては、まもなく非自由の騎士としての新身分＝家人の輩出源となり、城の主人から高級勤務を命じられ、ついには国家の帝国官僚群を形成するまでになった。家人は自由人たる貴族に同化し、一三世紀後半には貴族身分、騎士身分を形成するだろう。

非自由人の解放の動向もこれに並行していた。ヨーロッパ各地で、森林の伐採と開墾、そして新村形成の動きがあり、新開拓地へ赴いて植民者として定住した不完全自由人が、開墾・植民事業へと参加して領主から解放され、自由人になったのである。こうして、バスティードとかカストルムと呼ばれ、南フランスやイタリアに数多建設された城塞集落や他の新村落が、いたるところに見られるようになるだろう。

（注）フランク時代…ゲルマン民族の一部族であるフランク族によって王国が形成されていた五世紀後半頃から十世紀頃までを指す。

国

一一、一二世紀からは、その成立事情がいかなるものであれ、ヨーロッパの南北で都市が自治特権を得、それぞれ参審人や執政官が中心となって、内政・外交を担うようになる。これらの都市の主要構成員は、商人・職人とその家族であり、貴族たちでさえ、完全市民権を享受するために商人に見紛う生活をすることになった。市民身分は職業身分としてギルドへと組織され、彼らには、人格的自由と都市政庁への参加能力および武装の権利があった。

まやかしの三身分論

ところで聖職者・貴族らに従属する第三身分（働く者）とは、長らくもっぱら「農民」のことであった。しかし一二世紀末になると、君主の傍らで活動する第三身分というのは、labor（肉体労働）ではなくnegotium（取引）を生業とする者を指すこととなる。貨幣の流通が盛んになるにつれ、後者はますます国家に役立つ機能をはたすだろう。[3] 君主の宮廷では、いずれの身分も給与・利益・金銭によって飼い慣らされていた。そもそも中世初期と違って、中世盛期以降、王侯の宮殿は森や平野の中ではなく、まさに都市の真っ直中に建てられた。そこで都市の主役である商人は、たとえ貴族らに軽蔑されても、宮廷生活にも不可欠の存在になる。貴族・騎士の優越性も、じつは国家や都市に役立つという点では、大きく崩れていくのである（傭兵・市民兵の誕生）。

中世を下るにつれ、お金が万能振りを発揮し、商品経済は宮廷にも容赦なく入ってくる。君主はとにかく金庫のお金を周期的に蕩尽して家臣らに大度を示し、彼らの［　X　］を買う必要があったし、戦争をするにも城塞を築くにも、あるいは武器や馬を買ったり傭兵を雇ったりするにも、はたまた捕虜の身代金を準備したり死者を埋葬したりするのにも、多額のお金がかかった。子弟の教育や娘の嫁資、トーナメント[注]開催にも、膨大な費用を計上しなくてはならなかった。宮廷に集まる官吏・廷臣・食カク[B]がふえればふえるほど、財政も膨れあがった。こうした中、宮廷の貨幣流通にうまく乗った成り上がりが登場する。祖先が農民や職人・商人だという宮廷人も、けっして稀ではなくなろう。

このように、中世初期から中世盛期の社会動向を瞥見しただけでも、いかに急テンポで「身分」の実態が変わっているかは、［　b　］だろう。ところが、中世盛期以降も公式に流通していた身分像はまさに［　c　］、しかも静的なものであった。いかに静的な身分像が長寿であったかは、神に仕える者（聖職者）、武器で国家を守る者（貴族）、平和的な仕事で国家を養い維持する者（第三身分）、この三身分が国家を構成しているとの考え方が、フランスでは革命期[注]まで無傷で通用してきたことからも窺われる。

（注）トーナメント…ここでは騎士たちが馬に乗り槍を持って行う試合を指している。ファンファーレや旗などの装飾を伴い、大勢のギャラリーが見守る中、騎士たちが広場で戦う。

（注）革命期…フランスで一七八九―九九年に起こったブルジョア革命の時代を指す。

国

4 その三身分は、起源をなす中世から延々と幾多の世代に受け継がれ、神聖にして永続する社会・政治秩序としてヒエラルキー化している、との捉え方であった。それらは互いに補完し合う職務をもち、三角形を成して連帯している。三という数字の魔力か、これは神秘的で平衡の感情を保つ。ヨーロッパ人にとって、完全な分割は三でなければならない。三分割こそ、創造主の計画に順応する構成の軸であり、しかも合理的な分け方なのである。その三分構造は可視的そして不可視的な宇宙全体の構造に内属しているのだから。

中世初期の世俗世界において、農業的な社会は身分としては農民と領主しか知らなかった。つまり人間を支配者と隷属者の二手に分類して、それを社会構成の基本と考えた。また教会のほうは、すべてをヒエラルキーで考えていた。天使やコスモス、地獄や悪魔までが階層秩序を成しており、ならば当然、人間界もそうでなければならなかった。時代が進んでも、世俗・教会ともに既存の秩序を肯定し守ろうとする保守性を根強くもっていた。身分秩序はすべて神によって定められていると信じていたのだ。この紋切り型思考の不動性には、驚くべきものがある。

以上に概観したように、中世盛期にはすでにきわめて多様に分化していた諸身分の現状に、5 その不動のモデルはそぐわないのに、一体、なぜそのイメージが生きつづけたのだろうか。

代表例を挙げてみよう。

一一世紀の二〇年代に、ラン司教のアダルベロンがその『ロベール敬虔王に捧げる歌』で、かたやカンブレー司教のジェラールが『カンブレー司教事績録』で、つぎのような三身分像を最初に提示した。それは、この地上にある神の家は、祈る人、戦う人、働く人（耕す人）の三身分から成り、これらの三身分は互いに支え合い不可分に結びついている。それぞれの職務は残りの二つのためにあり、三者が自分以外の身分の世話・配慮をする……というものである。

アダルベロンとジェラールが完璧な社会のモデルとして提示した三身分社会については、その後しばらく――一世紀半ほど――ふたたび取り上げられることがなかった。この修道士全盛の時代には、フルリーであれクリュニーであれ、修道士のイデオロギーとイマジネールがスタンダードとなった。それは修道院共同体との関連の下に組織化された社会を考えるので、人類を二分割する。一方にクリュニー会やクリュニーによって改革された他の修道院の完徳者たち（囲壁に囲まれた修道士ら）がおり、聖職者は修道士の保護監督下にある。この選民集団に対して、他方の側には未完徳者がいて、両者の間には隔壁がある。ただし隔壁には開いた門が付属しているという。

一二世紀後半になると、『ノルマンディ公の歴史』の中で、サント・モールのブノワが、ふたたび三職分像を完璧社会

国

のイメージの中心にもってきた。ブノワの唱える三身分は、アダルベロンやジェラールを踏襲して、聖職者、貴族、農夫の三者のことで、やはりそれぞれの奉仕の相互補完性が想定されている。そして彼は三身分それぞれの悦びと苦しみ、固有の功績、モラルなどを順々に述べていく。だがアダルベロンなどと異なり、ここでは三身分論は脱聖化されており、国家の諸構造を支えるものとして提示されている。いやさらに国家の諸構造が依拠している領主制的生産様式をさえ正当化するものとなっている。彼の見地に従えば、「国家」(respublica) の平衡を確保するこれらの三身分の上に、奉仕と特権の公平な分配が載っている。ここでは教会・キリスト教世界の調和が懸案ではもはやなくて、問題は世俗世界なのであり、それをまとめるのは自律し俗化した君主権力である。

貴族たちは、ブノワの書に提示されたようなキリスト教的三身分論を［ d ］したイメージを広めようと努め、一三世紀末以降にはそれを文学世界にも反映させていくことで、成り上がりのブルジョワを真の貴族の［ Y ］だと貶め、自分たちから遠くへ追いやろうと図った。彼らを「ヴィラン」(卑賤な者／自由農民) と呼び、エリートたる聖職者と貴族から分離して、身分が混ざったりしないよう警戒した。そして祝祭における行列の序列や儀礼における資格や役割など、ことあるごとに身分・地位の上下関係を公然と示そうとしたのである。

ところが現実には、貴族や聖職者の間にさえ、労働・勤労の価値を重んじる者たちが現れ、また拝金主義も横行していたため、儀礼のバリケードも一時的な効果しかなく、身分の牆壁(しょうへき)はいたるところで崩れていった。どこまでもエリートを気取る者は、世俗騎士団のような閉ざされた団体・クラブを作って、入会規則を厳格化し、「平民」の接近を排除したが、もはやそれは戯画でしかなく、政治・社会の実際の力関係からは大きく乖リ(A)していくだろう。

しかしそれでも、その戯画への執着はあきれかえるばかりに頑強だったし、その紋切り型が、紋切り型でありながらも目に見えない［ Z ］のように、ヨーロッパの自由と民主主義の発展を長く妨げたことも事実である。

中世あるいは前近代ヨーロッパでは、制度が人格から独立したハードなものとして確立しておらず、人的絆の積み上げが、それを補って秩序を保っていた。しかし、人と人とが繋がりあるいは区別され、社会がそれなりに円滑に動いていくためには、それにふさわしい自己認識と他者認識が必須であろう。そこにこそ、膠のように粘り強いイメージの明瞭な結晶化の出番があるのであり、それらのイメージには、強い感情が備給されることになる。

(池上俊一『儀礼と象徴の中世』による。ただし一部変更した。)

国

問一 二重傍線A・Bのカタカナを漢字に直した場合と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 18 ・ 19 。

A 乖リ 18

① トウリ党略に従って行動する。
② リキュウを見学する。
③ ノウリをよぎる。
④ カンリが密輸を取り締まる。
⑤ リシュウ届を提出する。

B 食カク 19

① 指先のカンカクが繊細だ。
② カクヘイキ廃絶運動に取り組む。
③ 月日は百代のカカクにして、行きかう年もまた旅人なり。（「おくのほそ道」）
④ あれとこれをヒカクする。
⑤ カクドをつけてボールを投げる。

問二 空欄a・b・c・dに入る最も適切な語を、次の①～⑥のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は a 20 、b 21 、c 22 、d 23 。

① 一目瞭然
② 右往左往
③ 旧態依然
④ 換骨奪胎
⑤ 本末転倒
⑥ 時代錯誤

問三 空欄X・Y・Zに入る最も適切な語を、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 24 ～ 26 。

24 X
① 商品　② 歓心　③ 顰蹙　④ 失笑

25 Y
① 虎穴　② 走狗　③ 蛸壺　④ 猿真似

26 Z
① 指先　② 腕　③ 足枷　④ 歩幅

問四 傍線1「表象としての身分制」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 法的な制度としての身分制ではなく、エリート階層が固執して人々の反発を武力で押さえつけながら維持した身分ないし階級。

② 現実の社会・経済条件に照らした身分ないし階級ではなく、大半の人間が親から引き継いでいる身分ないし職業。

③ 現実の社会・経済条件に照らした身分ないし階級ではなく、教会、王、貴族らが一方的に形成した身分ないし階級。

④ 法的な制度としての身分制ではなく、社会全体で経験や慣習に基づいてそうあるべきだと信じられていた身分ないし階級。

問五 傍線2「いわゆる古典荘園がその古典性を保てなくなり」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 中世初期の農業的な社会は農民と領主という隷属者と支配者により構成されるのが一般的であったが、時代の変遷とともに領主などの貴族層が市民と同じ生活をするようになったこと。

② 中世初期の農業的な社会は農民と領主という隷属者と支配者により構成されるのが一般的であったが、時代の変遷とともにさまざまな中間的な身分・階級が出現し、二分割モデルが通用しなくなったこと。

③ 中世初期の農業的な社会は農民と領主という隷属者と支配者により構成されるのが一般的であったが、時代の変遷とともに領主の支配から自由になった人々から構成される村落が増えていったこと。

④ 中世初期の農業的な社会は農民と領主という隷属者と支配者により構成されるのが一般的であったが、時代の変遷とともに領主に仕える隷属者の活動内容が肉体労働から商取引へと変遷したこと。

国

問六 傍線３「君主の宮廷では、いずれの身分も給与・利益・金銭によって飼い慣らされていた。」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 宮廷で、家臣たちが金品の下賜や役職などの供与によって王侯に仕えた一方、王侯たちも必要な資金を確保するために、財力があれば成り上がり者といえども宮廷に受け入れざるを得なかったこと。

② 完全市民権を得た市民たちが商取引によって経済的に成功していたので、王侯の宮殿では貴族たちでさえ商人の生活を模倣するようになったこと。

③ 王侯の宮廷では商品経済が幅を利かせるようになったため、騎士・貴族は傭兵や市民兵より高い給与を受け取り、人格的自由と武装の権利を守ろうとしたこと。

④ 王侯の宮殿が森や平野ではなく都市の中心に建てられるようになったため、都市の主役である商人たちが宮廷において内政・外交を担うようになり、大きな役割を果たすようになったこと。

問七 傍線４「その三身分は、起源をなす中世から延々と幾多の世代に受け継がれ、神聖にして永続する社会・政治秩序としてヒエラルキー化している、との捉え方であった。」とあるが、その説明として**適切でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① ヨーロッパでは、三身分モデルは中世初期には妥当で、神によって与えられた社会の構造であるという発想が生まれた。その後二、三百年の間に多様に展開して実情に合わなくなっていったにもかかわらず、一八世紀後半まで保持された。

② ヨーロッパの人々は、フランス革命期までキリスト教宇宙観に見られるヒエラルキーの発想を現実の社会秩序に適応し、身分秩序はすべて神によって定められていると信じていた。

③ ヨーロッパでは、中世盛期には人間を支配者と隷属者の二手に分けて考える中世初期の社会モデルが実態とはかけ離れていったため、それを克服した三身分への分割こそが神によって定められた社会秩序を示していると信じられていた。

④ ヨーロッパの人々は、一八世紀後半まで、聖職者、貴族、第三身分という身分の分割を、創造主が生み出した宇宙の秩序に照らして構成された神聖で永続する社会秩序だと捉えていた。

問八 傍線5「その不動のモデルはそぐわないのに、一体、なぜそのイメージが生きつづけたのだろうか」とあるが、その問いに対する著者の答えとして最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 中世ヨーロッパではキリスト教の世界観が既存の秩序を保つために重要であったため、聖職者、貴族、農夫の三者がそれぞれの悦びと苦しみ、固有の功績、モラルなどの範囲内で相互に奉仕しあい、補完しあうことが想定されていたから。

② 近代以前のヨーロッパでは、人々は身分を神によって定められた秩序であると信じており、社会・政治制度の不完全さを社会構成員のステレオタイプ化されたイメージに基づく相互の関係性によって補っていたから。

③ 貴族や聖職者と「平民」の間の身分の違いはいたるところで無意味になっていったが、エリートに固執する人々が閉ざされた団体・クラブを作って、入会規則を厳格化して「平民」の接近を排除しつづけたから。

④ 成り上がりの商人たちを真の貴族からは区別して貶め、この価値観を文学世界にも反映させていくことで、身分が混ざったりしないように警戒し、エリートたる聖職者と貴族から分離しつづけたから。

問九 傍線6「三身分論は脱聖化されており」とあるが、三身分が脱聖化されることの説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

① 三身分論は、一一世紀頃は地上にある神の家であるこの世で人々が協働するという宗教的なイメージだったが、時を経るにつれて、世俗の君主が支配する「国家」の平衡を保つ制度として捉えられるように変化したこと。

② 三身分は、当初聖職者が完徳者としてヒエラルキーの頂点にいたが、やがて聖職者の間にさえ拝金主義が横行し、世俗的な価値が重視されるようになり、俗化した君主権力に支配されるようになったこと。

③ 三身分は、国家の諸構造が依拠している領主制的生産様式をさえ正当化するものとみなされ、エリート階層が奉仕と特権を公平に分配するとみせかけて農民たちを搾取する制度へと変貌したこと。

④ 三身分論は、キリスト教の世界観に根差しているが、そのために天使や宇宙のみならず、地獄や悪魔までもが階層秩序を成してしまっていること。

問十　傍線7「儀礼のバリケード」とあるが、その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① エリートたる聖職者と貴族が、ブノワの書に提示されたような三身分論に固執し、一三世紀になると文学作品に、社会的な地位の差を明瞭に描き出させたこと。

② エリートたる聖職者と貴族が、人々の目に留まる状況を利用して、祝祭における行列の序列や儀礼における資格や役割などで、ことあるごとに身分・地位の上下関係を強調し、「平民」と身分が混ざりえないことを態度で示したこと。

③ エリートたる聖職者と貴族が、政治・社会の実際の力関係とはあまり関係のないところで団体・クラブを設立し、「平民」の接近を排除しようとした排他的な態度のこと。

④ エリートたる聖職者と貴族が、三身分のイメージに強い感情を抱き続けたため、祝祭における序列や儀礼における資格や役割などが社会の戯画と化してしまったこと。